慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	モンテーニュと友情における一体化
Sub Title	Montaigne et la fusion dans l'amitié
Author	竹中, 公二(Takenaka, Koji)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2021
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.121, No.2 (2021. 12) ,p.18- 27
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	荻野安奈教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01210002-0018

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

モンテーニュと友情における一体化

竹中　公二

モンテーニュは『エセー』第1巻に収められた「友情について」の章で、早逝した畏友エチエンヌ・ド・ラ・ボエシーとの刎頸の交わりについて語っている。そこでは、アリストテレスに由来する「2つの身体に宿る1つの魂[i]」という伝統的なイメージだけでなく、「意志の融合[ii]」という独自の表現によっても友情のあり方が提示されている。友情において2人の友人は一体化するという考えはこの章だけに留まらず、1588年に追加された第3巻9章「空しさについて」でも、「友情について」の章を補足するような形で述べられている。

「空しさについて」の章は、1580年の『エセー』初版刊行後に行なわれたイタリア旅行から大きな着想を得ており、旅に関する考察の合間に生前のラ・ボエシーとの交流が思い起こされている[iii]。そこでは両者の友情は「意志の結合[iv]」と言い表されており、精神的な結びつきはモンテーニュの友情論に一貫している。友情とは2人の友人同士の分かちがたい結びつきであるという考えは、『エセー』出版以前に書かれたラ・ボエシーの著作にも見られるが、モンテーニュにおいて内面性がより具体的に強調されている。特にそれは「友情について」でも「空しさについて」でも精神的な「享受」と呼ばれており、モンテーニュ独自の友情観が反映されているように思われる。

そこで本稿では、意志の結びつきという考えを手がかりに、モンテーニュが友情における精神的な一体化をどのように捉えていたかを探る[v]。まず、ラ・ボエシーの友情観をモンテーニュがどのように理解していたかを見る。続いて、モンテーニュにおいて友情と意志がどのような関係にあるのかを検討し、最後に『エセー』における友情と享受の問題を考察する。

1. 魂の融合

1554年、23歳でボルドー高等法院に入ったラ・ボエシーは、そのおよそ5年後、同僚で3歳年下のモンテーニュに人文主義の素養を認め、深い親交を結ぶ[vi]。モンテーニュは1557年、ペリグー租税法院の廃止に伴ってボルドー高等法院に異動していた。ラ・ボエシーは1563年に亡くなるまで、少なくとも3篇のラテン語詩をモンテーニュ宛てに書く。これらの詩は、1570年にモンテーニュが編纂し翌年パリのフェデリック・モレル書店から出版されたラ・ボエシーの著作集中のラテン語詩集*Poemata*に収められている。

とりわけ、そのうちの1篇（« *Ad Michaëlem Montanum* »）は322行に及び、同詩集内で最も長い詩となっている[vii]。その導入部でラ・ボエシーは、2人の親交がどれだけ急速に深まったかを、ウェルギリウス『農耕詩』（II, 9-34, 47-82）から借用した接ぎ木のイメージを用いて描写している。そして、接ぎ木が「隠れた自然の掟によって」台木と瞬く間に結合するのは、「魂の力」についても同様であるとして、モンテーニュとの友情について歌っている[viii]。J. S. ハーステインによれば、この接ぎ木のイメージに関して、ラ・ボエシーはオイケイオーシスという古代哲学の理論を念頭に置いていたかもしれないという[ix]。同理論は、ストア派において同種の動物や人間が互いに集まって群れや社会を形成する過程を自己愛から説明するのに用いられていた[x]。

ラ・ボエシーがこうしたストア派的な友情観を取り入れたのは、キケロの哲学的対話篇を通じてだと考えられる。キケロは『ラエリウス』（XXI, 81）の中で、オイケイオーシス理論を友情の成立に適用してこう説明している。「人間は自分を愛するし、二つのものを一つにするほど（*paene unum ex duobus*）、その人の魂と自分の魂を混ぜ合わせたいと思う、そのような第二の自分を探し求める存在なのだ［…］[xi]。」魂の融合としての友情観はアリストテレスにおいてだけでなく、キケロにおいてもこのように定式化されてルネサンス期の人文主義者の間に膾炙していた[xii]。

モンテーニュは自ら出版したラ・ボエシーの自分宛ての詩について『エセー』「友情について」の章で短いながら直接言及している。それは、モンテーニュが1588年刊行の『エセー』第3版に加筆した、いわゆるボルドー手沢本にはじめて現れ、1595年版に反映された一節である。「彼［＝ラ・ボエシー］は、優れたラ

テン語の諷刺詩を書き、それは出版されている。その中で彼は、あっという間に完璧なものとなった私たちの仲の深まりの速さについて弁解している。あんなに短い間しか続かずあんなに遅くに始まったので［…］、時間を無駄にできなかったのだ[xiii]。」ラ・ボエシーが2人の急速な親睦を「弁解」したのは、先に見たモンテーニュ宛ての詩の冒頭部に当たるが[xiv]、これは参照元であるキケロを意識してのことだと思われる。

今日と違い、古代ローマにおいて友情はもっぱら私的な領域よりも公的な領域に属するものと考えられていた。キケロは『ラエリウス』（X, 33-35）の中で、幼年期からの友人たちも、大人になって性格が変わったり、政治的な対立関係に入ったり、あるいは無理難題な要求によってその友情はたやすく壊れてしまうと述べている。ゆえに、友情の真価が問われるのは長い年月を経て互いの性向や立場が固まった後になる（*ibid*., XX, 74-75）。そのため、ラ・ボエシーは自らの友情を語るために、キケロに依拠しつつもそこから距離を取る必要があった。

モンテーニュも、ラ・ボエシーのラテン語詩をこうした文脈を踏まえて理解していたはずである。実際、「友情について」の章では初版の1580年から、先にオイケイオーシス理論に関して引いた『ラエリウス』の一節をおそらく意識しながらも、キケロにおいては「ほとんど（*paene*）」とされて比喩的だった友人同士の魂の融合が、実体的に捉えられている。「私が話している友情では、それら［＝私たちの魂］は互いに満遍なく混じり合うので、両者を結びつけた縫い目は消え去りもうわからなくなる[xv]。」さらに、モンテーニュはボルドー手沢本で、この直前に、『ラエリウス』（XX, 74）からの引用を含む加筆を行なっている。この引用はまさに、友情については友人同士の性格が決まった後に判断すべきという、今しがた見た箇所からなされている。ただし、モンテーニュはキケロの文章を逆手に取って、お互いが成人してから芽生えたラ・ボエシーとの友情とは矛盾しないような形で用いている。そのため、モンテーニュは、ラ・ボエシー同様、親友同士の魂の融合という考えが、キケロにおいて哲学的・政治的な背景を与えられているのを十分知っていたと推測される。

2. 意志の掌握

これまで、友情における魂の融合という伝統的なトポスがアリストテレスだけ

でなくキケロにも見られるということ、キケロがこのトポスをストア派哲学によって理論化していること、さらにラ・ボエシーもモンテーニュもおそらくこの理論的背景も含めて古典的な友情の定義を理解していたであろうことを確認した。とはいえ、モンテーニュは「友情について」以外の『エセー』の箇所でオイケイオーシス理論に触れてはいるものの[xvi]、それは一般的な親の子供に対する愛情に関してである。

それに対して、ラ・ボエシーとの友情についてはお互いの意思疎通のあり方が前面に押し出されている。この点については、1570年に死後出版したラ・ボエシーの著作集から一貫的である。この著作集では、前述したラテン語詩集に加え、クセノフォンとプルタルコスの翻訳などひとつひとつの作品にモンテーニュが献呈書簡を附している[xvii]。そして巻末には、モンテーニュが自分の父親に宛てて書いた「ラ・ボエシーの死を伝える手紙」が添えられた。

目次上では巻頭に来るクセノフォン『家政論』の翻訳に、モンテーニュはルイ・ド・ランサック宛の献呈書簡を序してこう述べている。「生前、彼［＝ラ・ボエシー］は［…］とても強く結ばれた友愛の契りを私と交わしてくれたので、彼の魂の中に私が勘案したり判断したりできない側面や動きや動機はありませんでした[xviii]。」同様に、著作集の巻末に収められた父親宛の「ラ・ボエシーの死を伝える手紙」の冒頭では次のように書かれている。「私たちが互いに抱いた唯一無二の兄弟愛ゆえに、私は彼が生前持った意図や判断や意志について、おそらく人が誰か他の人に対してできる限りで、非常によく理解していました[xix]。」このようにモンテーニュは、友情において親友同士の魂が1つになるという伝統的なイメージからさらに一歩進んで、ラ・ボエシーとは文字通り肝胆相照らす仲であったということを強調する。ラ・ボエシーの死から7年経った1570年に、モンテーニュがこのように繰り返し述べるのは、彼にとって亡き親友との友情で得た経験が完璧な意志把握に集約されるからであろう。

さらに10年後、モンテーニュは『エセー』初版からこの事態を「私たちの意志のかくも完全な融合[xx]」と呼んで変わらぬ見解を述べている。「何を言われようが、私の友の意図や判断について私が持っている確信から私を引き剝がすことはできない。彼の行動は、たとえそれがどのように見えても、私がその動機をただちに見つけることなく提示されることはできないだろう[xxi]。」この文章自体は、直前で引かれた古代ローマの哲学者ガイウス・ブロッシウスの逸話に対する応答

となっている。

ブロッシウスは友人である政治家ティベリウス・グラックスが行った改革を支持しており、もし仮にグラックスに「カピトリウム神殿に火を放て」と命じられたとしたらとラエリウスに聞かれて、「従っただろう」と答えたという[xxii]。キケロは『ラエリウス』（XII, 40）においてこのブロッシウスの返答を、前段で見た友情を毀損する要求の一例として挙げて強く批難し、国家に反逆する罪を犯すような不誠実な友人からは離れるべきだとした。それに対してモンテーニュは、キケロの名前は直接挙げていないが、ブロッシウスの言葉を問題視する人々は友情の「神秘」を解しておらず、ブロッシウスはティベリウスの意志を把握していたが故にそう答えたのだと述べている[xxiii]。

モンテーニュがキケロに対してここまで強く反論する要因のひとつには以前から出版しようと目論んできたラ・ボエシーの『自発的隷従論』をめぐる経緯があったからかもしれない。同論は僭主の不当な圧政に対して本来の自由を回復することを呼びかけているが、モンテーニュは1570年の著作集に収録することを一度諦めている[xxiv]。しかし、サン・バルテルミーの虐殺以降、激化する宗教戦争の中で、ラ・ボエシー自身は強硬なカトリック派であったにもかかわらず、『自発的隷従論』は匿名のまま反カトリック王権のパンフレットに改変されて出版されてしまった。

そうした中、今度モンテーニュは『自発的隷従論』を『エセー』の中心に据えるつもりでモンテーニュは自著の執筆を進めた[xxv]。しかし結局、『エセー』初版を目前にして、1579年5月、『自発的隷従論』のテクストを含む著作がボルドー高等法院の判決によって焚書とされたことで[xxvi]、ラ・ボエシーの主著たる論考を世に出す最後の機会を事実上失うことになる。それでもモンテーニュは『自発的隷従論』の著者が誰であるかを明かし、ラ・ボエシーの思想に疑いを挟む余地はないとして彼を擁護することをやめなかった。

3.「魂による享受」

1570年から一貫してモンテーニュは、意志や判断という高次な次元での精神的な結びつきをラ・ボエシーとの友情の中に見出していた。「［友情は］私の意志すべてを捕えて彼の意志の中に沈み溶け込まさせに行き、同じくらいの気持ちと

勢いで、彼［＝ラ・ボエシー］の意志すべてを捕えて私の意志の中に沈み溶け込まさせに来た［…］[xxvii]。」モンテーニュはこのような友情における意志の融解という考えを、『自発的隷従論』の著者の擁護だけでなく、真の友情のあり方として在りし日のラ・ボエシーとの交流についても敷衍している。

モンテーニュは『エセー』初版から、「友情について」の中で恋愛を「逃げ去るものを追いかける狂った欲望[xxviii]」と呼んで友情を対比している。それによると、恋愛では2人が懇意な関係へと移行した段階で、肉体的な欲望がその享受としての快楽によって満たされて消えてしまうのに対し、「友情は欲されるにつれ享受され、その享受においてのみ立ち上がり育まれいや増す[xxix]。」つまり、恋愛は肉体的なものであるが故に充足されてしまうが、それとは反対に、友情は精神的なものであるために求められれば求められるだけ大きくなるという。この享受の問題が、「意志の融合」を通じて強調される友情の精神性と関わってくる。

ここで繰り返し用いられている「享受（jouir / jouissance）」という語は、当時第一義として「所有（posséder / possession）」とほぼ同義に用いられていた[xxx]。ただし、1690年版のフュルチエールの辞書によれば、両者が区別される場合は、何かを所有することはそれを所有するための正当な資格を持っていることをいうのに対し、ある物を享受するというのはそれから実際の利益を得ることを指していた。この点についてモンテーニュは、「所有することではなく、享受することが人を幸福する[xxxi]」と書いている。そして、財産や幸運の享受は、それ自体の価値ではなくそれを手にしている者の精神状態に左右されるとしている。また別の箇所では、「享受と所有は主に想像力に属す[xxxii]」とも述べている。一方、モンテーニュにおいて財産と快楽はともに享受される対象として捉えられており、フュルチエールにおいても「享受」に精神的・肉体的な快楽を得るという意味も現れてきていることが指摘されている[xxxiii]。

1588年に出版された『エセー』第5版で新たに追加された第3巻中の「空しさについて」では、この享受の概念を通じて、ラ・ボエシーとの精神的な繋がりが語られている。モンテーニュとラ・ボエシーは知り合ったのち任務で幾度もボルドーから離れることがあったが[xxxiv]、モンテーニュは2人が一緒にいないことをむしろ逆手にとっていたという。「私たちはお互いに離れていることで、よりよく生の所有を充実させ拡大していた[xxxv]。」ここで言われる「生の所有（la possession de la vie）」とは、お互いがそこにいない相手のために「生き、楽し

み、見ていた[xxxvi]」こととすぐ次に具体的に示されている。この点について、モンテーニュはセネカの書簡（LV, 11）を念頭に置いていたのかもしれない。セネカは離れているルキリウスに対して、「友人は心で手許に引きとめるべきだ。そうすれば、どこへ行っても離れることはない[xxxvii]」と書き送り、あたかも自分と一緒に勉学や食事、散歩の時間を過ごしていると想像するよう勧めている。

しかし、モンテーニュはこのセネカの考えを自らの友情観に引きつけてこう付け加えている。「別離が私たちの意志の結びつきをより豊かにしていた。肉体的な現前を飽かずに求めるのは、魂による享受における弱さを少し露わにしている[xxxviii]。」これ以上の説明はされていないが、モンテーニュにとってラ・ボエシーとの友情は意志の融合に集約されることは先に見た。おそらくここで所有と享受が暗に対比されており、「魂による享受（la jouissance des ames）」とは、離ればなれでいる親友同士がもうひとりの分まで生きようとすることから、さらに互いに意志を差し向けあいそれをひとつにしようとすることだと考えられる。

これまでラ・ボエシーから出発して、古代に遡る一心同体としての友情論を、モンテーニュがどう表現したのかを見てきた。ラ・ボエシーはキケロから友人同士の魂は一体化するというイメージを取り入れつつも、友情の長さがその真価を計るという考えには反論していた。一方、モンテーニュもこうした古典的な友情観を理解していたと考えられるものの、親友同士の魂の融合は比喩であることをやめ、意志の結合という自らが経験した主観的真実に取って替わられる。そして、友と離ればなれでいながらも意志において結びつこうと強く望むことが「魂による享受」という表現に結実した。

註

i　Montaigne, *Les Essais*, éd. J. Balsamo, M. Magnien et C. Magnien-Simonin, Paris, Gallimard, 2007, p. 197［以降，モンテーニュ『エセー』からの引用はこの版に拠る］. 「ボルドー手沢本」での加筆（*ibid*., var. *h*）. Cf. アリストテレス『ニコマコス倫理学』IX, VIII, 2.

ii　I, 28/27, p. 197.

iii　モンテーニュはイタリア旅行中の1581年5月11日，ルッカ近くの湯治場ラ・ヴィッラ温泉で不意にラ・ボエシーのことを想起し物思いに沈むことがあった：« Et,

ce mesme matin, escrivant à M. Ossat, je tombay en un pensement si penible de M. de La Boetie, et y fus si longtemps sans me raviser, que cela me fit grand mal » (*Journal de voyage de Michel de Montaigne*, éd. présentée, établie et annotée par Fr. Rigolot, Paris, PUF, 2015, p. 162).

iv III, 9, p. 1022.

v モンテーニュにおける友情のテーマについては以下を参照：Jean Starobinski, *Montaigne en mouvement*, éd. revue et complétée, Paris, Gallimard, 1993, p. 15-136 ; Gérard Defaux, *Montaigne et le travail de l'amitié : du lit de mort d'Etienne de La Boétie aux* Essais *de 1595*, Orléans, Paradigme, 2001.

vi Montaigne, *Les Essais*, éd. cit., p. 200, n. 3.

vii ラ・ボエシーのラテン語詩に関しては次を参照：Perrine Galand-Hallyn, « Les "essais" latins d'Étienne de La Boétie (*Poemata*, 1571) », *Étienne de la Boétie, Sage révolutionnaire et poète périgourdin*, actes du colloque international, Duke University, 26-28 mars 1999, textes réunis par M. Tetel, Paris, H. Champion, 2004, p. 121-156.

viii La Boétie, *Poemata*, XX, v. 16 et 21, dans *Œuvres complètes*, éd. P. Bonnefon, Bordeaux / Paris, G. Gounouilhou / J. Rouam & Cie, 1892 [désormais OCEB], p. 225.

ix James S. Hirstein, « La Boétie et la justification d'une amitié précoce : le début (vers 1-32) de la "Satyre latine" (*Poemata*, XX) et le *Laelius* de Cicéron », *Montaigne Studies*, vol. XI, 1999, p. 132. Cf. Laurent Gerbier, « Entretenir les semences, greffer les amitiés. Le système des analogies végétales chez La Boétie », *Cahiers La Boétie*, n° 5, 2015, p. 92-94.

x オイケイオーシス理論については次を参照：Valéry Laurand, *La politique stoïcienne*, Paris, PUF, 2005, p. 9-58.

xi キケロー『友情について』中務哲郎訳, 岩波文庫, 2004年, p. 81 ; Cicéron. *L'Amitié*, texte établi et trad. par Fr. Combès, introd. et notes de Fr. Prost, Paris, Les Belles Lettres, 2011, p. 96-97.

xii 2人の魂が１つになるというルネサンス期の友情観の例として, 他にも15世紀末フィレンツェ出身の画家ポントルモの『2人の友人の肖像画』（c. 1521-1523）が挙げられる. そこには黒い服を着た2人の男たちがほとんど重なるように並んで立っている姿が描かれ, 片方が持っている手紙には『ラエリウス』の一節（VI, 22）が引かれている. この引用文自体はオイケイオーシスを説明するものではないものの , ルネサンスにおいて分身としての友人というイメージをキケロが権威付けする役割を果たしていたことを示唆している. 同肖像画については次を参照：Cécile Beuzelin, « Le double portrait de Jacopo Pontormo : vers une histoire du double portrait d'amitié à la Renaissance », *Studiolo*, n° 7, 2009, p. 79-99.

xiii I, 28/27, p. 195.

xiv La Boétie, *Poemata*, XX, v. 1-3, OCEB, p. 225.

xv I, 28/27, p. 194-195.

xvi II, 8, p. 405. Cf. Emiliano Ferrari, *Montaigne. Une anthropologie des passions*, Paris, Classiques Garnier, 2014, p. 212-218.

xvii これらの献呈書簡に関しては以下を参照：J. Starobinski, *op. cit.*, p. 91-101 ; G. Defaux, *op. cit.*, p. 169-187 ; M. Magnien, « Montaigne encomiaste : les lettres-préfaces à la *Mesnagerie de Xénophon* et aux *Vers François* de La Boétie », *Montaigne. Une rhétorique naturalisée ?*, actes du colloque international tenu à University of Chicago (Paris) les 7 et 8 avril 2017, sous la dir. de Ph. Desan, D. Knop, B. Perona, Paris, H. Champion, 2019, p. 23-44.

xviii OCEB, p. 63. ルイ・ド・ランサックはフランソワ1世の非嫡出子で, 1556年にはモンテーニュの父ピエール・エイケムの後を継いでボルドー市長となった（cf. Ch. Sauzé de Lhoumeau, « Un fils naturel de François Ier, Louis de Saint-Gelais baron de la Mothe-Saint-Héray », *Mémoires de la Société des antiquaires de l'Ouest*, 3e s., t. XVI, 1940, p. 5-175).

xix OCEB, p. 307.「ラ・ボエシーの死を伝える手紙」の執筆年代に関しては議論が分かれている（cf. G. Defaux, *op. cit.*, p. 48, n. 2).

xx I, 28/27, p. 197.

xxi *Ibid.*, p. 196.

xxii *Ibid.*, p. 195-196. この逸話は主にキケロ『ラエリウス』（XI, 36), ウァレリウス・マクシムス『有名言行録』（IV, VII, 1）, プルタルコス『対比列伝』に伝えられている. ただし前二者では, ブロッシウスにこの質問をしたのをラエリウスとしているのに対し, アミヨ訳プルタルコスではスキピオ・ナシカらとなっている（Plutarque, *Les Vies des hommes illustres, Grecs et Romains, comparées l'une avec l'autre* [...], *translatées* [...] *par maistre Jaques Amyot* [...], Paris, M. de Vascosan, 1565, f. 575 r°）.

xxiii I, 28/27, p. 196.

xxiv OCEB, p. 61-62.

xxv I, 28/27, p. 189.

xxvi *Ibid.*, p. 201. Cf. « Arrêt du Parlement de Bordeaux ordonnant de brûler les livres intitulés : *Mémoires de l'Estat de France*. 7 mai 1579 », transcrit et communiqué par Gabriel Loirette, *Archives historiques du département de la Gironde*, 1933, p. 52-53.

xxvii I, 28/27, p. 195.

xxviii *Ibid.*, p. 192.

xxix *Ibid.*

xxx モンテーニュは動詞jouirを間接他動詞でなく直接他動詞として使うことが多く, エチエンヌ・パーキエにガスコーニュ方言を咎められている（Estienne Pasquier, *Choix de Lettres sur la Littérature, la Langue et la Traduction*, publiées et annotées par D. Thickett, Genève, Droz, 1956, p. 45). 『エセー』における享受については以下を参照 : Katherine Almquist, « Du prêt et de l'usufruit des images. Le droit de la propriété

dans la pensée sceptique de Montaigne », *L'Écriture du scepticisme chez Montaigne*, actes des journées d'étude, 15-16 novembre 2001, réunis et publiés par M. -L. Demonet et A. Legros, Genève, Droz, 2004, p. 169-178 ; Daniela Boccassini, art. « Jouissance – Jouir », *Dictionnaire de Michel de Montaigne*, nouv. éd. revue, corrigée et augmentée, sous la dir. de Ph. Desan, Paris, H. Champion, 2008, p. 619-621 ; Kathy Eden, *The Renaissance Rediscovery of Intimacy*, Chicago, UCP, 2012, p. 114-117.

xxxi I, 42, p. 284.

xxxii III, 9, p. 1020.

xxxiii II, 12, p. 519. Cf. Jacques Le Brun, *Le Pur amour. De Platon à Lacan*, Paris, Seuil, 2002, p. 67.

xxxiv Anne-Marie Cocula-Vaillières, *Étienne de La Boétie et le destin du* Discours de la servitude volontaire, Paris, Classiques Garnier, 2018, p. 126-127.

xxxv III, 9, p. 1022.

xxxvi *Ibid*.

xxxvii セネカ『哲学全集5 倫理書簡集I』高橋宏幸訳, 岩波書店, 2005年, p. 209.

xxxviii III, 9, p. 1022.